

# 青空の下で稲刈りと「豚汁」を —アジア・アフリカ支援米稲刈りに50名強が参加—

前日までの雨、更には翌日からの台風の影響が懸念された狭間の9月29日（土）、これ以上は望めないほどの絶好の天候に恵まれて、七飯町中野において「食・みどり・水を守る道南地区労農市民会議」主催による「アジア・アフリカ支援米稲刈り」が行われた。

6月にみんなで苗を植え、たわわに実って頭（こうべ）を下げる稲穂の前には、親子連れ・家族連れなど54名が続々と集まり、開始を待ちわびていた。



向田副会長のユーモア溢れる司会で幕を開けたセレモニーは、最初に残間議長が「世界の中で食料を破棄する割合は日本が極めて多い。田植えや稲刈りを通じて改めて食の大切さを学んでほしい」と参加者に訴えた。また、ご来賓として参加した立憲民主党・逢坂衆議院議員や連合渡島地域協議会・長谷川会長からも「貴重な体験学習を通じて日本の主食<米>の重要性・育てる厳しさを知ってほしい」と挨拶が行われたのち、いよいよ今年度の稲刈り作業がスタート。

初めて持つ「鎌」に最初は恐る恐る刈っていた子供達も、ひとたび慣れると親の心配もそっちのけで黙々と稲刈りに集中し、刈り取った稲穂を親や大人がしっかりと束ねたり、稲架にかけるなどの連携もあちこちで見せていた。

初めて持つ「鎌」に最初は恐る恐る刈っていた子供達も、ひとたび慣れると親の心配もそっちのけで黙々と稲刈りに集中し、刈り取った稲穂を親や大人がしっかりと束ねたり、稲架にかけるなどの連携もあちこちで見せていた。

一所懸命な子供の姿に目を細める親の顔は例年と同じであったが、1時間もすると予定していたエリアでの作業はほぼ完了に近く、満足げな子供達の顔が広がっていたのは、何時見ても自然と顔がほころぶものでもあった。今年は、92歳のおば一ちゃんも参加し、孫や娘と一緒に親子3代で稲刈りをしている姿もほほえましくうつつた。

所有者の池田氏からは、刈り取った苗の一部を持ち帰ることも提唱され、子供ものの中には、「隣のおじさんとおばさんに持って行ってやりたい」と、大事に抱える姿も見受けられた。

参加者全員による記念写真撮影が終了後は、田んぼ脇にシートとゴザを敷いた臨時青空食堂が開設され、昼食・交流会が行われた。

全員に配られた弁当に加えて、前日から事務局一丸で仕込んだ「豚汁」が振る舞われ、まるで親子での遠足気分のように楽しく和気藹々の中、みんなで舌鼓を打っていた。

なお、今回刈り取られた米は、10月13日（土）に開催予定されている「第9回食と環境まつり」内において出荷式が行われ、今年も900キロの米が支援米としてリマ共和国へ送付されることとなる。

